

書評

鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会、2000

権春花 李玉丹

本書は、平成10年度外務省委託研究の成果であり、アジア政経学会「現代中国研究叢書」第37号として2000年に公刊された。本書は、多民族国家中国のなかの朝鮮民族（以下朝鮮族）について、移民初期から改革開放以後の今日までの民族関係を中心に理論的かつ実証的に研究したものである。本書は、約150年の中国における漢族—朝鮮族関係史とも言えるだろう。著者は入手可能な史料や近年の中国側での研究成果を最大限にいかして、分かりやすく論じている。

また著者は、市場経済化への道を進んでいる今日の中国朝鮮族は、歴史的な岐路に立たされていると指摘し、朝鮮族社会は経済、教育、民族集居地再生など、いろいろな危機に対処すべきだと強調しながら、また21世紀の朝鮮族の戦略についても触れている。

1. 内容紹介

第I部は「朝鮮民族の中国移住と民族関係—移民初期から『満州事変』まで」と題され、第一章「朝鮮人東北移住初期の民族関係」では、中国人地主と朝鮮人小作制度が出現し、一種の民族差別が存在したことは否定できないが、移民初期にあつて大きな矛盾はなく、「お前はお前、自分は自分」でお互いに接触することはなかったと論じた。第二章『『間島協約』以後の在朝朝鮮人』では、当時の日本政府の政策について述べられている。この時期、朝鮮で勃発した3.1独立運動の影響で東北各地では朝鮮人の反日デモが展開されたが、北京政府は中立ないし不介入を表明した。第三章「三矢『協定』を巡る東北在住朝鮮人の位置」では、日本の「満州」介入姿勢が強まると、

張作霖軍閥政権は日本への防衛策として朝鮮人への迫害を強めるが、それ以外の漢族と朝鮮族の「老百姓」同士の関係は比較的平穏なものであり、一定の距離を置きながら相互に共存している二つの民族の姿であった。この時期「万宝山事件」での冷静な対処から見られるように、平穏な民衆関係の中からやがて「抗日民族共同闘争」の基盤が紡がれていくことになったと指摘している。

第Ⅱ部『『満州国』期の中朝民族関係』の第一章「朝鮮人『満州』移民政策」では、この時期日本が朝鮮人移民政策に積極的になった理由が述べられ、それは朝鮮人を利用しなければ植民地「満州」の維持は不可能であることが明らかになったためだという。そして日本は効果的な「満州」支配のために朝鮮人を「満州」社会の名目上の中間層に設定し、民族間の反目を起こそうとしたと論じている。第二章「朝鮮人移民と中国人農民間の土地問題」では、東北での日本の民族離間政策は、東北の中国人農民に一定の心理的な影響を与えたと指摘した。とはいえ、続いて第三章「抗日運動における民族関係」では、在「満」朝鮮共産党員の中国共産党入党と反「民生団」闘争について紹介し、解散された朝鮮共産党の党員全てが中国共産党へ加入出来たわけではないが、絶対的多数の朝鮮共産党員は中国共産党へ入党し、日本による民族離間工作に抗して漢族とともに闘ったことを強調した。第四章「周保中『延辺朝鮮民族問題報告を巡って』」では、「満州」支配とそれに対する民族共同闘争は、朝鮮移民初期における「お前はお前、自分は自分」という孤立的な漢族と朝鮮族の民衆間の関係を大きく転換させたと指摘している。

第Ⅲ部「民族自治の光と影—延辺朝鮮族自治州の建国後二九年」、第一章「延辺朝鮮族自治州の創建」では、約束されたはずの分離権を含む民族自治はついに実現せず、統一国家の中の地方自治に過ぎない「民族区域自治」しか認められなかったことを明らかにした。第二章「延辺における社会主義建設」では、農村を中心に延辺における社会主義建設の中での朝鮮族の役割と政治運動の中での朝鮮族について論じている。つまり、農村を中心に延辺では全国より一足早く互助組を作ったことにより、農業生産收穫量が高まったが、1957年から始まった反右派闘争、民族整風運動、人民公社そして大躍進などで多くの朝鮮人は「右派分子」、「地方民族主義分子」として迫害を受け、延

辺の社会主義建設は厳しい試練を受けた事について論じている。続いて第三章「文化大革命下の朝鮮族」では、共産党と中央政府が保証したはずの民族自治権の遂行は、1950年代後半から始まる長い政治動乱の中で「地方民族主義」や「階級敵」として激しく断罪され、迫害されたことが紹介されている。

第IV部「民族教育に見る中国朝鮮族—揺れ動くアイデンティティの記録」の第一章は「中国朝鮮族教育の黎明」と題され、移民初期から1945年までの朝鮮族の教育は、中国で同化攻勢と闘い続けて来た歴史だとも言えると指摘している。第二章「社会主義時代の朝鮮族教育」では、建国後の10年間で中学校教育が普及し、非識字者をほぼ一掃したこと、またそれは中国の少数民族で最も早いものであったことが指摘されている。しかしその後の政治運動の中で、民族教育は「地方民族主義」を助長するものと抑圧された。著者に拠れば、朝鮮族の結合を今まで維持させてきたのはほかならぬ民衆の素朴な教育熱と学校教育を維持しようとする地道な努力の結果である。第三章「現代朝鮮族教育」では、朝鮮族教育の今日的状況と、人口変動、市場化が教育にもたらす影響及び双語教育をめぐる今後の課題について論じている。終わりの「朝鮮族のアイデンティティと民族教育」では、中国朝鮮族が出身祖国とは異なる国家・社会の中で民族言語を主軸とした伝統文化の多くを良好に継承し、民族的アイデンティティを高いレベルで維持し続けたことを高く評価した。しかし、改革開放と市場経済化という中国の潮流の中で、朝鮮族教育は再び停滞的な局面を迎えており、中国朝鮮族の民族的アイデンティティも大きな岐路に立っていることも強調している。

第V部「歴史的転換期を迎えた中国朝鮮族—二一世紀への課題」では、第一章「中国朝鮮族の経済概況」で、かつて農業主体の民族と考えられていた朝鮮族は、既に商業の色彩の強い民族に変貌しつつあると論じた。第二章「朝鮮族と対外関係」では、90年代に入って低迷する対朝鮮・ロシア国境貿易に変わり、延辺の対外経済関係は韓国、日本、東南アジア諸国、アメリカなどの西側に重点が置かれるようになり、朝鮮族の出稼ぎ労働者による外貨は、延辺州の年間財政収入に等しいと指摘している。第三章「朝鮮族と今日の民族関係」では、朝鮮族の「祖国観」問題などを取り上げ、第四章「二一世紀への発展戦略」で、今日の朝鮮族は「富裕化実現」の夢と「民族集団拡散化」

という現実の間で激しく揺れ動きつつ、市場経済化という未増有の荒波を乗り越えていくしかないであると強調した。

2. 本書の成果と課題

評者が本書の研究成果を評価する第一の理由は、著者が「漢族と朝鮮族の関係」の全体像を描こうとしたことである。なぜなら、今日における朝鮮族の中国の少数民族としての地位の問題、経済概況、対外関係、文化などを考察するときに、漢族との間で築かれてきた歴史的な状況を検証しなければならないことは当然だからである。その意味で清末から今日にいたるまでの中国朝鮮族の問題を、漢族との関係から、政治・経済・教育など多方面から論じた本書は、中国朝鮮族の歴史と現在を考察するとき必携の一冊となろう。

二つ目は、後半で「民族自治」の現実を明らかにしたことが際立っている。「民族自治」に関しては、いくつかの先行研究がある。例えば、中国民族政策の研究者である加々美光行氏には『知られざる折り』（新評論、1992年）がある。彼はこの中で、中国共産党が少数民族に「民族自決」を約束したにもかかわらず、「民族抑圧」、「人間抑圧」を進めてきたと批判している。

また、松本ますみ氏の『中国民族政策の研究：清末から1945年までの「民族論」を中心に』（多賀出版、1999年）は、中国共産党の民族政策実施過程を取り上げ、中国の少数民族自治問題について分析し、中国からの分離を認める民族自決権ではなく、区域自治のみが認められてゆく過程を明らかにした。

本書で著者は、中国で朝鮮族の民族問題に焦点を当てて、朝鮮族が民族平等を求めながらも、1949年以後、実際には不平等な状態におかれていたことを明らかにし、加々美氏や松本氏が取り上げた多民族国家中国における少数民族のおかれた現実の在り様をさらに深く検討するうえで、有益な実証研究を新たに付け加えたと評価すべきであろう。

本書で上記の成果が生み出された理由はなぜなのか？この点について筆者自身は次のように述べている。「私は（著者）韓国籍を持つ在日韓国朝鮮人二世である。中国朝鮮族に対する関心は、純粹に学問的な部分から発したものであるというよりは、日本社会の中で、マイノリティとしての生活を強いられてき

た自身の経験と課題に即したものと見える」(338頁)。つまり、著者の自分の人生の中でその先鋭な問題意識は生み出されたのであり、その情熱に支えられて極めてリアルな分析が行われている。

とはいえ評者は著者が、1945年以前の状況について、日本の民族離間政策にもかかわらず、漢族と朝鮮族の関係は余り悪化しなかったとみなしている点に評者は疑問を持っている。

たとえば著者は1910年から1940年代までの漢族からの民族差別については余り論じていないが、윤휘택「〈만주국〉의 ‘2 등국 (공) 민’, 그 실상과 허상」(『역사학보』 한국역사학회편, 169집, 2001년 3월)、尹輝鐸「〈満州国〉の‘2等国(公)民’, その実像と虚像」『歴史学報』韓国歴史学会編, 169輯, 2001年3月)は、都市に住んでいる朝鮮人は住宅問題、子弟養成問題などで極めて不利な条件におかれ、「国民」としての待遇は受けられず、「満州国」のほかの民族から、「面倒でつまらない」存在として蔑視されたことを実証している。

さらに尹輝鐸氏は、「満州国」時代、職業別に見ると朝鮮人は農業分野だけでなく、商工業分野でも他民族に比べて差別的扱いに甘んじていたと指摘している。また、在満朝鮮人の劣悪な居住環境、住宅難、職業難にも、資本、技術、学問などがほとんどない移民者たちの生きる姿が反映されているとする。

またこの問題を「満州国」全体のなかに位置づけるためには、都市における分析が不可欠だと評者は考えている。つまり、漢族と朝鮮族の民族関係を考える時に、農村だけの研究では朝鮮族の全体像がもっとはっきり見えないのではないだろうか。たしかに「統計によると1940年末まで在満朝鮮人総数は145万384名で、そのなかで17個主要都市に住んでいる朝鮮人は14万1854名として9.8%に過ぎない。しかしほかの都市居住者、そして都市を基盤にして活動してきた無職業者を含めて大体30万名ぐらいになるだろう」(前掲尹論文148、149頁)。その意味で、都市の朝鮮族は数が少なく、著者が焦点を農村の朝鮮族において、都市に於ける朝鮮族についてはあまり触れなかったは当然である。だが今後はこの問題も検討する必要があるだろう。

いずれにしても漢族との関係は1945年以前においても、始終支配と被支

配の面が多く、日本の離間政策と共に朝鮮族は官方からの抑圧も受け、実は平等ではなかったとみなすべきではなからうか。日本の侵略を批判するあまり著者は、当該時期の漢族と朝鮮族の間の対立を相対的に低く評価しているように評者には感じられる。

本書は出版から5年を経たとはいえ、類書はいまだ見当たらない。著者は本書をふまえて今日までも中国朝鮮族に関心を持ってさらに研究を進めている。たとえば、北陸AJECの機関誌『えーじえつく・レポート』に著者の研究成果「北東アジア新時代の中国朝鮮族～歴史と展望」(VOL、34、2004年2月)が発表されている。とはいえ本書は今日においても、中国朝鮮族の問題を考えるうえでまず参照すべき研究成果であり、今後の研究は本書に学びつつ、深められてゆく必要がある。

権春花 (chunhua42@hotmail.com)

李玉丹 (liyudan1970@hotmail.co.jp)